

調平正

引つ越しの荷物
は、ささやかな
ものだった。自
ら引いた荷車に
くくつたのは、

布団と二つの行李(こぶし)、それに竹製本棚一つ。行李には衣類と本が詰まっていた◆賀川豊彦が自伝的小説「死線を越えて」に書く引つ越しの一場面だ。

向かったのは十軒続きの長屋である。部屋は、表が三畳、奥が二畳。お金がなかったもので、うち三畳分しか古畳を敷けず、障子もお古だった。ランプを買えないまま、暗闇の中で新しい暮らしが始まった◆これが一九〇九

(明治四十二年十二月二十四日のことだ。神戸の貧しい人々が住む地域で布教活動しよう。そう決意しての引つ越しである。社会活動家として名を残す賀川だが、その波乱の人生が、この荷車引きから始まったといえる◆ことしのクリスマスイブで、ちようど百年となる。神戸文学館(神戸市灘区)はすでに、「献身百年」と題した企画展(二月二十四日まで)を始めた。活動の拠点だった生まれ故郷の神戸を中心に、多様な足跡をあらためて振り返る年になるだろう◆貧しさを生まないための労働、農民運動や協同組合、世界連邦運動：。実に幅広い活動の底には、どんな精神が流れているのか。賀川が種をまいた一つ、コープこ

うべの講演会でかつて、武田清子国際基督教大学名誉教授が「社会を決して高みから見下ろさない信念」と表した(コープこづべ七十年史)。常に弱い立場の人々に寄り添う姿勢と言い換えてもいい◆貧富の差が渦を巻く

時代を、賀川は生きた。荷車を引いて渦中へ飛び込む青年の姿は、格差にきしむ現代から見ても、なんと刺激的なことか。